

# 発展途上国における学校体育の実態調査

- 「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」を通して -

制野 寛

(学籍番号：17PE1072, 推薦教員：玉腰和典助教)

## 1. 問題と目的

カンボジアでは日本の NGO/NPO Hearts of Gold の支援を受け、2009 年に小学校で保健体育科が本格導入された。しかし、教育予算の貧困、教育養成・現場教育の未整備、教育行政の伝達機構などの問題で授業の実施は極めて限定的なままに留まっていた(鐘ヶ江淳一,2018)。

そこで、大学教員と学生による国際的なボランティア団体である ICVs (International Cooperation Volunteers) は、カンボジアの子どもたちに「必要にして最低限度の学校教育」を提供することを目的として、2019 年の「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」を実施し、具体的に 3 つの企画を設定している。

1 つ目は、現地の小学校で運動会を開くことである。カンボジアの小学校では日本とは違い運動会という行事は存在しない。そこで、現地の子どもたちに運動会という教科外行事が持つ教育的価値(子どもたちにとって・先生たちにとって・地域の住民にとって)を実感してもらいたい。ここでは、全校集会やクラス会などで、身近なものを用いて楽しむ、または現地の子どもたちが生活の中で楽しんでいる運動遊びを想定しながら構想する。

そして、将来的には現地の環境や文化に合わせて「運動会が年中行事になる」→「体育への関心が共有させる」→「運動会に向けた練習が行われるようになる」→「教師が授業指導のノウハウを身に付ける」→「体育授業が週 2 時間実施されるようになる」という効果を期待している。

2 つ目は、提案授業である。この活動は、施設がない、教具もない、経験も乏しい、そんな小学校教師、中学校教科専門教員を物心両面から励ますこと。そして、新教材・指導技法を提案し、生徒の学ぶ姿からそれらの可能性を感じてもらおうことを目的としている。また、現地の先生が行事

単元としての授業実践へと一步踏み出すことをサポートし、「授業から行事へ」、「行事から授業へ」、「可能などころから実践を」を提案し、実感してもらい、カリキュラムの構造・系統への芽生えを促す。

3 つ目は、養護施設訪問である。この活動では現地の養護施設を訪問し、カンボジアの現状を知ることはもちろんだが、学ぶこと・生きることすら厳しい児童たち、そして彼らを一生懸命に養育している NPO に対し、日本からの優しい眼差しを届けること。彼らと日本市民の架け橋になることを目的としている。

まだまだ経済的に貧しく、体育教育がなかなか浸透していないという問題を持っているカンボジアであるが、上述したプロジェクトはカンボジアに体育教育を広げるだけではなく、体育教育を通して協力することの大切さを知ってもらえるという特徴もっており、重要な教育支援活動であるといえる。しかし、プロジェクトが教科と教科外を統一した行事単元での支援を中心とするため、カンボジアにおける教科体育のあり方については十分に検討されていない。そこで、教科体育の教育支援を実施する上で、まずはカンボジア教師の体育意識や施設状況などの実態把握をしていくことが必要となる。

## 2. 方法

「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」に参加しながら、特に小学校での運動会や体育の提案授業の際に、現地の教師へのインタビューや学校施設や体育施設の状況把握をしていく。

## 3. 結果および考察

### (1) 小学校での提案授業を通して

実際に現地の環境を見ながら、3 つの小学校で指導案を考え提案授業をした。前もって日本で体

育の授業の指導案を作っては行ったものの、現地の校庭は狭いうえに石やゴミが散らかっている状態で、とても予定していた授業をできるような状況ではなかった。そのため、その場で指導方法を変更したり、工夫したりし、何とか授業の形になった。具体的な内容としては、ペットボトルを丸めテープで巻いたものをバトンとして「リレー」をしたり、用具のいない「馬飛び」をしたりした。子どもたちにとってはどれも初めてする運動であり、戸惑いも見られ、運動能力的にも日本より少し劣っているように思えた。しかし、興味津々で楽しそうに活動している児童が多かった。

#### (2) 運動会の開催を通して

運動会に関しては、提案授業で行った運動の内容を踏まえて、「リレー」、「馬飛び」などを入れた障害物競走、「綱引き」などを行った。子どもたちにとっては赤組と白組に分かれて、得点を競うような競技はしたことがなく、必死になって自分のチームを応援し、また、チームに貢献しようと頑張っている様子だった。最後の得点発表では、勝ったチームは全力で喜び、負けたチームは本気で悔しがっていて、「協力」することで何かを成し遂げることの大切さを学んでもらえた実感した。現地の教員から話を聞いたところ「子どもたちがこれほど何かに必死になっている姿を見られるとは思っていなかった」と話していて、とても意味のある活動になった。

#### (3) 小学校教員の養成課程に所属する大学生への提案を通して

今回の提案授業は小学生をメインとしてきたが、PTTC という小学校教員養成課程の大学生にも提案授業を行った。PTTC というのは、小学校から大学まで一貫で、小学校教員を養成するための学校であり、この学校に入学したら必ず卒業し、教員になるということが定められている。

提案授業の内容は器械体操であり、現地の大学生に器械体操について知っているか聞いたところほとんど全員が知っていた。しかし、学校では器械体操に対する知識は身に付けさせるものの、実際にやっついてはいない様子だった。そのため、比較的簡単な前転をメインに授業をしたが、驚くことにきれいにできる生徒はほとんどいなかった。しかし、練習を積むごとに上達をしていき、前転、後転、側転などの基本的な技術を身に付けることや、体育教育をする意義を学んでもらうことができた。

#### (4) カンボジアにおける学校体育の実態

カンボジアの子どもたち自身は体育授業事体を楽しんでいて、私たちが教えた「馬飛び」などは、休み時間に自分たちから遊んでいる姿も見られた。このような実態から、体育がもし授業として存在しているなら、子どもたちも一生懸命取り組み、その意義に気付いてもらうことができると感じた。

しかし、同時にカンボジアで体育教育が普及しない原因として、「道具・校庭の設備」が不十分なこと、「教員の数」が不足していること、教員の体育に対する「知識・関心」が低いことも明らかになった。

「道具・校庭の設備」に関しては、そもそも体育を行う道具がなく、校庭も体育を行うために作られていなかった。

「教員の数」に関しては、人数の不足により、児童1人当たりの受けられる授業時間を短ければ、教師1人当たりの負担も相当なものだった。

教員の「知識・関心」に関しては、PTTCでの提案授業でも感じたが、知識があっても実際にやったことがある人がいないため、授業にはならない。また、小卒・中卒で教員をしている人も多いため、体育に関して何も学んでいない人もいる。また、提案授業や運動会をするにあたって、このような文化を広めていくためには現地の先生に私たちの姿を見てもらい、真似してもらうことが重要であり、その旨を伝えたのにも関わらず、まったく見てくれない先生やその場からすぐになくなってしまう先生が多く見られた。

#### 4. 今後の課題

今後、体育教育を広げるためにはカンボジアの教員たちに、「体育教育で子どもたちが得られる運動能力があること」、「成功したことで得られる達成感があること」、「何かを成し遂げるために協力できること」を感じてもらい、その大切さに気付いてもらえるように投げかけていかなければならない。

#### 主要引用文献

鐘ヶ江淳一 (2018) ICVs プロジェクト 2018 活動の概要について、SPLEA 協議会 ICVs 夏季合宿報告資料 (中村学園大学セミナーハウスほくさん)